

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02463

研究課題名（和文）教育実践へのリフレクションを通じた教師・保育者の継続的な学びのあり方に関する研究

研究課題名（英文）Research on continuous learning of teachers through reflection on pedagogical practices

研究代表者

村井 尚子（MURAI, NAOKO）

京都女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：90411454

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：教育および保育実践のリフレクションによって教育的タクトをはじめとする教師の専門性が向上することについて、理論的かつ実証的に明らかにすることができた。理論的な面では、単著『ヴァン＝マーネンの教育学』（ナカニシヤ出版、2022年）を上梓した。さらに、メルロ＝ポンティの現象学的な身体論、アントニオ・タマシオの脳科学、美学の議論などを参照することで、リフレクションによって行為の規定にある自身の感情への気づきを促すことを明らかにした。さらに、保育所・小学校への参与観察、インタビュー、質問紙調査などを通じて、リフレクションを実践することが教師の専門性の向上に繋がることを実証的に検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、教育学研究や実践においてリフレクションという営みについて数多く語られるようになってきているが、リフレクションがどのような行為を指すのか、リフレクションによって何が明らかになるのか、どのような教師の専門性の向上が可能なのかを理論的かつ実証的に精査した研究は管見の限りほとんど見られない。本研究はこの点について検討と検証を重ねたという点において、学術的な意義があると考えられる。さらに、教師や保育者が実際にリフレクションを行う際の手法や注意点についても実証的に明らかにすることができた。これは、我が国および海外の教育実践者のリフレクションのあり方に広く影響を与え得るものであると言える。

研究成果の概要（英文）：This study allowed us to theoretically and empirically clarify how reflection on educational and childcare practices improves teachers' professionalism, including their pedagogical tact. On the theoretical side, he published a monograph, Van Manen's Pedagogy (Nakanishiya Press, 2022). Furthermore, by referring to Merleau-Ponty's phenomenological theory of the body, Antonio Damasio's brain science, and discussions on aesthetics, We revealed that reflection promotes awareness of one's own feelings in the regulation of actions. Next, through participant observation, interviews, and questionnaires in daycare centers and elementary schools, we empirically verified that practicing reflection leads to the professional development of teachers.

研究分野：教育学

キーワード：教育的タクト リフレクション コルトハーヘン ヴァン＝マーネン 8つの窓 教師の専門性 現象学的記述 タマシオ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

シヨン (Donald Schön) が提唱した「反省 (省察) 的实践家モデル」(1983) は、教師・保育者 (以下、教師と記す) の専門性を価値づける概念として、重要な位置を占めている。これは、「自分の行動の中に暗黙のままになっている理解」についてリフレクション (反省・省察) を重ねることで、よりよい行為を形づくる「直観的な知」や「わざ」を培っていく学びのモデルである。研究開始当初は、教育学研究及び実践においてリフレクションの重要性が認知されてはいたものの、リフレクションの学術的な定義や具体的な方法、どのような帰結をもたらし得るかが判然とせず、この用語のみが一人歩きしている状況であった。

また、ヘルバルト (J. F. Herbart, 1776-1841) が提唱して以来ドイツ教育学で主に研究されてきた教育的タクト (pedagogical tact) に関しては、主にドイツの教育学者たちによって研究が行われてきたが、その涵養、養成の可能性については、管見の限りあまり扱われてきていない状況であった。

2. 研究の目的

本研究の目的はまず、人と人が向き合う、真正な時間が流れており、その瞬間瞬間がクリティカルな意味をもち得る、そういった教育の場において、子どもの未来の善さに向けて行為できるタクト豊かな教師となるためには、どのような手立てが可能であるかを理論的かつ実証的に明らかにすることである。

このために、教育的タクトの概念を明らかにし、教育的タクトを涵養するためにはどのような手立てが必要なのかを検討する。そのために、二つ目のキーワードとしてのリフレクションについても検討する。

そして、教育実践のリフレクションによって教育的タクトが涵養され、子どもの未来の善に向けてより適切な行為 (タクト豊かな行為) が行える教師となるという仮説を立てた。そこで、メルロ＝ポンティの身体論と現代の脳科学を中心とした理論的な検討を行い、同時に、幼稚園から小学校、中学校までの教員養成での実践的検証、および小学校、中学、保育園の現職教員のリフレクションの実践を通じた検証を行うことで、この仮説を検証する。

3. 研究の方法

マックス・ヴァン＝マーネン (1942-) の教育関係論および教育的タクトに関する諸論文、また、著書 *Researching Lived Experience, Tact of Teaching, Pedagogical Tact* などを精読することで、彼の教育学の根幹にある「子どもの未来にとってよい (とその時点で思われる) ことをなす」という教育の定義の意味と、それを前提とした教師、大人と子どもとの関係性について、また、子どもと大人との教育的な関係性が成立している場で発現している教育的タクトについて、原理的に検討した論文をもとに単著『ヴァン＝マーネンの教育学』(ナカニシヤ出版、2022年) を上梓した。この成果については下記 1) で詳述する。

その上で、教育的タクトを涵養するためにリフレクションが重要な役割を果たすことが改めて明らかになったので、これまで精確な定義がなされないまま教育学研究や実践で使用されてきた「リフレクション (省察)」の原理的検討を行い、その定義と意義を明らかにした (下記 2))。

次に、リフレクションの手法として、現象学的記述とコルトハーヘンの 8 つの窓という 2 つの視点から開発を行い、その実践的意義を実証した。まずはヴァン＝マーネンをはじめとするユトレヒト学派で行われてきた現象学的な記述を教員養成の現場で使用できるようにし、教育実習のリフレクションを現象学的記述において実施することで、実習生がどのような気づきを得るかを検証した (下記 3))。

コルトハーヘンの 8 つの窓については、教員養成の場と保育者の OJT の場で使用し、その効果を検証した。具体的には、報告者らは、2018 年より 8 つの窓あるいはそれを応用した 16 の窓を用いた保育のリフレクションを 2018 年から複数の園において導入し、継続的にリフレクションの営みを重ねつつ、その成果を検証してきている。各園には保育実践のリフレクションをマネジメントするリフレクション・リーダーという分掌を置いていただき、定期的に研究者、研究協力者 (山梨県甲府市かほるこども園および東京都世田谷区かほる保育園統轄園長 落合陽子、新潟県佐渡市羽茂こども園 園長松野敬、滋賀県大津市星の子保育園園長 中西淳也、日本保育協会研修部 今井豊彦) 園のリフレクション・リーダーが集まって保育リフレクション研究会を実施してきた。研究会では、各園の現状の話し合い、リフレクションについての成果と課題の共有を行い、これによってリフレクションを実践に取り入れる手法が確立してきている。

園で月に 1 回から 2 回のペースで実施されているリフレクションを記録したリフレクションシートを分析し、同時に参与観察、インタビュー調査、質問紙調査を実施することで、下記 4) および 5) の研究成果を得ることができた。

6) では、教員養成課程における教育実習のリフレクションを実施し、その内容を現象学的に記述していく訓練を行うことで、実習生の教育的な思慮深さが深まっていった事例について報告する。

4. 研究成果

1) ヴァン＝マーネンの教育学における教育関係論と教育的タクト概念の解明

教師や保育者の日々の教育（保育）実践における専門性を規定するにあたって、教育的タクトが重要な役割を占めると言える。本研究では、教育的タクトの概念について精査するために、語源の検討、教育学における教育的タクト概念使用の歴史的変遷、教育的タクトについての先行研究の分析を行った。そのうえで、カナダの現象学的教育学者マックス・ヴァン＝マーネンの教育的タクト論を検討した。教育的タクトは、ヴァン＝マーネンによって「どうすればよいか分からないときに、どうすればよいか知っていること」と言い換えられている。教室のなかで、あるいは子ども（たち）と向き合っている場において、その子ども（たち）にとって、どうすることが最もその子（たち）の未来を考えたときによいと思われるのか、教師は、その場そのときに判断し、行為している。しかし実際には、子ども（たち）と対峙している場においては、その子（たち）の行く末といまの現状をじっくりと考量し、最も適切な行為をいくつものオルタナティブのなかから選び取るということは不可能に近い。なぜなら、そこには、人と人とが向き合う、真正な時間が流れており、その瞬間瞬間がクリティカルな意味をもち得る、そういった教育の場において、教師が、心理的にせよその場を離れて熟考する余地が許されていないからである。そのように熟考する余地が許されていない場において、それでも、子どもの未来の善さに向けて行為できるタクト豊かな教師となるために必要な手立てとして、教育実践へのリフレクションを挙げることができる。

ヴァン＝マーネンは、教育的タクトの構成要素を 教育的敏感さ 教育的な意味に対するセンス 教育的感受性 教育的なふるまいの4つに分けている。そして、この教育的タクトを身につけるには、教育的な感受性（敏感さ）と、教育的な思慮深さを涵養していくことが求められるとの解釈に達した。

2) リフレクションと教育的タクトの涵養の関係性についての原理的検討

教育的な感受性（敏感さ）および教育的な思慮深さを涵養することで、教育的タクトの涵養が可能となるとの1)での結論を受け、これらが教育実践のリフレクションにおいて可能となるという仮説を立てた。

さしあたって、リフレクションの時間性についての検討を行なった。ショーンのリフレクション概念を表1のように分析することで、行為の中でのリフレクションを数ヶ月などの一定期間を通じて行なわれる行為を対象としたものと行為のただ中で行なわれるものに分けた。さらに、行為のただ中におけるリフレクションには、言語を用いたものと言語によらない感じ、フィーリングといった身体的な感覚を主とするものがあることを明らかにした。

表1 リフレクションの時間性

行為の前 (reflection before action)		
行為の中 (reflection in action)	一定期間の行為	
	行為のただ中	言語による省察 (行為の中断を伴う) 言語によらない省察 (感じ、フィーリング)
行為の後 (reflection on action)		

これらのリフレクションの中で、とりわけ言語によらない省察に焦点を当てることが重要であると考え、フィーリングのリフレクションを教育的なタクトとの関連で検討することとした。

そこで、まずは教育的な感受性と身体知としてのタクトのあり方を、身体の記憶、触れること、共感性、間身体性といった概念から読み解いていく試みを行った。鯨岡は、共感性のあり方について、共感者と被共感者が「互いに相手を脱中心化し合う」と解する。この状況は、メルロ＝ポンティが『幼児の対人関係』において、自己と他人とが共通の状況のうちに融け合い、分かれていないという「癒合的社会性」の状態について、それが年齢と共に清算されてしまうものではなく、成人になっても残っていると述べていることと繋がる。

この共感性のあり方は、現在、脳科学においても実証されてきている。我々は自己に起こりそうな出来事を予測すると、中枢神経が感覚に信号を送り、あらかじめ感覚が備えをする。この事態は、他者が痛みを覚えている様をみて、自分の身体にも痛みを感じるという共振・共鳴理論（廣松渉）の説明ともなり得る。そして、脳機能画像研究などにより、自分自身の身体感覚（内受容感覚）に感受性の強い人は、他者のごくわずかな喜びや悲しみの表情を認識できるといった実験結果が明らかになっている。これらの知見を総合すると、ヴァン＝マーネンが教育的タクトの構成要素であるといっている敏感さ、感受性の説明が共感性のあり方によって説明可能であると言える。そこで、こういった敏感さ、感受性をどのように高めるかが問題となる。

3) コルトハーヘンの8つの窓を用いたリフレクションと現象学的な記述の手法の開発と実践

的検証

コルトハーヘン(F. Korthagen, 1947-)は行為とリフレクションが代わる代わる行われるプロセスが経験による学びにおいて理想的であると、このプロセスを行為(action)、行為の振り返り(looking back on the action)、本質的な諸相への気づき(awareness of essential aspects)、行為の選択肢の拡大(creating alternative methods of action)、試行(trial)の5つの局面に分類している。5つの局面それぞれの頭文字を取ってALACTモデルと名付けられているこのプロセスは、教師教育者である大学教員が実習生に対して、あるいは実習生同士で互いに実習における経験のリフレクションを促すことによって進められるとされている。5つの局面のうちとりわけ重要かつ困難なのが、第2局面の「行為の振り返り」から第3局面の「本質的な諸相への気づき」への移行である。すなわち、実習中に経験した出来事における自身の行為への振り返りを通じて、その出来事における本質的な諸相に気づくことが求められるのであるが、この移行のために用いられているのが表2の9つの質問である(通例、8つの窓と呼ばれている)。

表2 コルトハーヘンの8つの窓

0. 文脈はどのようなものだったか? What is the context?	
1. 私は何をしたかったのか? What did I want?	5. 生徒たちは何をしたかったのか? What did the students want?
2. 私は何をしたのか? What did I do?	6. 生徒たちは何をしたのか? What did the students do?
3. 私は何を考えたのか? What did I think?	7. 生徒たちは何を考えたのか? What did the students think?
4. 私はどう感じたのか? How did I feel?	8. 生徒たちはどう感じたのか? How did the students feel?

この8つの窓のリフレクションを、コーチングの手法を用いながら実践することで、教育実践へのリフレクションを深めていく。とりわけここで肝要なのが4と8のフィーリングのリフレクションであるということを実践者に伝えている。

8つの窓のリフレクションについては、下記の通り5つの研究協力園(保育園・こども園)で実施したほか、小学校教師の学び直しの場、教員養成課程における教育実習の事後指導の場で主に実施した。研究協力園における成果については4)にまとめている。小学校教師の学び直しの場におけるリフレクションの成果については今後の課題である。

教員養成課程における教育実習の事後指導に関しては、教育実習論(学部3年次配当1単位)でも実施しているが、受講者が120名強と大変多いため、一人一人に対する丁寧な指導とフィードバックができていない。これに対して、教育学研究(3年次配当演習科目各2単位)および専修免許必修科目である教育哲学特論B(大学院博士前期課程1年次配当2単位)は、受講生が10名以下であるため、4から5時間をかけてリフレクションと現象学的記述の指導を行っており、この成果を論文にまとめており、下記6)において報告する。

4) 保育実践のリフレクションによる保育観の捉え直し

教育実践のリフレクションに関しては、5つの保育園において研究協力が得られたため、主に保育園の保育士・保育教諭が保育のリフレクションを行なっている内容と成果を検証のために使用させていただいた。研究協力者の園で定期的に行われているリフレクションを分析対象とした。

具体的には、8つの窓を用いたリフレクションを行い、その事例をさらに深めていくことで、各自の行為の基盤となっている保育観(行為と保育観との結びつき)が次第に明らかになってくる。とりわけ、フィーリングのリフレクションを実施することで、それぞれの実践者のうちに暗黙理にある価値と目の前の状況との齟齬が実践者のフィーリングに影響を与え(このフィーリング自体多くの場合は容易には表面化しない)、行為へと繋がっていることが分かった。そして、リフレクションによって実践者のうちにある保育観を捉え直していくことが教育的タクト豊かな振る舞いへと繋がると考えることができる。

しかしここまでの事例検討を通じて明らかになったことは、自身の子どもの理解や行為の妥当性を評価(保育実践の評価を)するためには自身の保育観との関連性を捨象して検討することはできないのではないかということ、さらに子ども理解の視点を改めていたり、行動の改善を望むのであれば、こうした保育観を「見直し」、改めていくこと(つまり、保育観の変容)が求められるということである。今回の事例の検討では「保育観に触れる」ことはできたが、その保育観が変容し、その後の行動に反映されたかについては必ずしも明らかにされていない。そこで、「気づきから変容へ」の道のりを明らかにするために、次のスモールステップの課題を用いたリフレクションの取り組みを導入した。

5) knowing-doing gap の架橋の可能性

リフレクションを通じた保育者の成長の研究を続けるうちに、8つの窓あるいは16の窓のリフレクションを通じて、自身の保育観に気づき、場合によっては保育のあり方を変更していくことがより子どもに寄り添った保育ができるようになって気づいたとしても、それがその後の行動の変容になかなか結び付かないという課題に直面するようになった。これはまさに、ジェフリー・フェアーとロバート・サットンによって knowing-doing gap として名づけられた問題であると言えるだろう。このギャップに取り組むために、筆者らは園のリフレクションリーダーと相談し、リフレクションにおいて気づきが得られた際に、本人が次のリフレクションまでに取り組む課題を決めて、そのフォローアップを行っていくという方途を考案した。取り組む課題は、例えば「一日に一回子どもに声をかけてみる」といった、大きな努力を要さない課題にし、本人がどのような課題に取り組むかを自己決定することが大切だと伝えた。これを「スモールステップの課題」と名づけている。

この効果を見るために、リフレクション時に作成しているリフレクションシートを分析した。なおかつその分析を基に園長及び副園長への半構造化インタビュー調査、保育者への半構造化インタビュー調査を実施することで明らかにすることを目論見た。その結果として、保育のリフレクションを継続的に実施していくことで、初任保育者が子どもの望んでいること、子どもの感情を感受しつつ保育を行うように保育者としての育ちが見られ、そのことで子ども自身も変化していていることが明らかとなった。さらに、分かったことと次に行動することとの結び付きの困難さに取り組むために考案した「スモールステップの課題」を用いることで、knowing-doing gap への架橋がある程度可能となっていると考えることができる。

この研究については、いまだ緒についたばかりであり、今後さらなる検証を重ねていく。

6) 教育実習へのリフレクションと現象学的記述

上述の通り演習の授業内で、学部生および院生が教育実習に参加した際に出会った印象に残っている出来事についてリフレクションを行う機会を設けている。その際、まず、コルトハーヘンの8つの窓を用いたリフレクションを行ってから、現象学的記述へと移行している。いきなり生きられた経験の記述を行うのはハードルが高く、最初に、グループでの、あるいは教師がコーチ役となった形での語りによるリフレクションを行い、それを8つの窓それぞれにその理由を追加した16の窓に書き写していくことで、その時の教師自身の感情や欲求、子どもの側の感情や欲求を明るみに出していく。その後で、現象学的記述のために、ユトレヒト学派の現象学的記述やヴァン・マナーンの著書に収められている現象学的記述の読み合わせを行い、その工夫について考える時間をつくる。そののち、現象学的記述を実践していくが、一度書いたものを全員で読み合わせて、工夫の必要がありそうな部分を指摘し合い、協働的にそれぞれの記述を仕上げていく。

教育実習生や現職教員が実践において出会っている日常的な子どもとの出来事や授業中の出来事のもももを問い直すことで、これまでの学校教育における自明性を問い直すことに繋がる。このことが教育的な思慮深さを深め、教育的タクトの涵養につながると言える。

もっとも、この6)の研究においても、上述した knowing-doing gap の課題は残っている。保育観の問い直しと同様に今後の研究の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 村井尚子	4. 巻 4
2. 論文標題 教育実習のリフレクションの意義の実証的検証	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都女子大学教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 143-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村井尚子・坂田哲人	4. 巻 18
2. 論文標題 保育実践のリフレクションの意義に関する一考察ー保育観の問い直しー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村井尚子	4. 巻 87（4）
2. 論文標題 現象学的教育学から教師教育へフィーリングへのリフレクションを通じて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育学会『教育学研究』	6. 最初と最後の頁 165-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村井尚子	4. 巻 3
2. 論文標題 問うこととしてのペダゴジーー教育実践のパトスの側面ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都女子大学教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 47-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村井尚子	4. 巻 17
2. 論文標題 ヴァン＝マーネンのペダゴジー論－ペダゴジーの語彙の再検討を通じて－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村井尚子	4. 巻 32
2. 論文標題 記述を通じた授業実践のリフレクションの可能性の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 75-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村井尚子	4. 巻 16
2. 論文標題 教育の営みにおけるパトス的な質	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村井尚子	4. 巻 2
2. 論文標題 ヴァン＝マーネンの教育学 (1) - 現象学との出会いとシスケとの邂逅	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都女子大学教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 55-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村井尚子	4. 巻 46
2. 論文標題 省察（リフレクション）再考－初等教員養成課程における取り組み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西教育学会年報	6. 最初と最後の頁 142-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 村井尚子・坂田哲人
2. 発表標題 リフレクションによるあるべき子ども像の問い直し
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第31回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村井尚子
2. 発表標題 reflection(（省察）再考)
3. 学会等名 関西教育学会第73回大会公開シンポジウム「今、教師の養成・研修に求められること－省察する力・つなぐ力」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村井尚子・坂田哲人
2. 発表標題 日々のリフレクションを通じた保育の質の向上
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村井尚子・坂田哲人
2. 発表標題 保育者の行為の基盤としての保育観－実践への省察を通じて
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第30回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村井尚子
2. 発表標題 現象学的人間科学への招待－IHSRC 2022に向けて－ 教育実践を生きられた経験として記述する試み
3. 学会等名 日本質的心理学会第17回大会会員企画シンポジウムパネリスト（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村井尚子・坂田哲人・落合陽子・松野敬・今井豊彦
2. 発表標題 保育実践への協同的な省察の効果への実証的研究（1）
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Naoko MURAI
2. 発表標題 Key pedagogical insights during phenomenology instruction
3. 学会等名 International Human Science Research Conference 2019（人間科学研究国際会議2019）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村井尚子・坂田哲人・今井豊彦・落合陽子・松野敬
2. 発表標題 日々の成長につながる保育実践のリフレクションの探究(ポスター発表)
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂田哲人・村井尚子
2. 発表標題 継続的なリフレクションの取り組みと保育者の省察性
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第29回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村井尚子・坂田哲人・今井豊彦・落合陽子・松野敬
2. 発表標題 日々の実践を基とした人材育成と組織づくりのあり方(自主シンポジウム)
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naoko MURAI
2. 発表標題 The Relationship Between Empathy and Tact: A Phenomenological Inquiry
3. 学会等名 International Human Science Research Conference 2022 (New York) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村井尚子
2. 発表標題 教育的タクトの涵養－共感性を手がかりとして
3. 学会等名 第3回人間科学研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 村井尚子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 330
3. 書名 ヴァン＝マーネンの教育学	

1. 著者名 村井尚子編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 青踏社	5. 総ページ数 202
3. 書名 子どもの未来を拓く教育原理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	坂田 哲人 (Sakata Tetsuhito) (70571884)	大妻女子大学・家政学部・講師 (32604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	阿部 直美 (Abe Naomi) (00411455)	京都女子大学・教職支援センター・特任教授 (34305)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	落合 陽子 (Ochiai Yoko)		
研究協力者	松野 敬 (Matsuno Takashi)		
研究協力者	中西 淳也 (Nakanishi Junya)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関